

自らチウラム水和剤をコーティングした種もみで、イネの初冬直播き栽培に挑戦する阿部倫太郎さん 15日、岩手県矢巾町



盛岡農高の阿部さん

盛岡市のベッドタウンで優良米の産地でもある岩手県矢巾町で15日、県立盛岡農業高校植物科学科の1年、阿部倫太郎さん(16)の挑戦が始まった。専業農家を目指す16歳は、将来の農地集約化でコメの栽培規模が50畝に達することを見越し、コメ農家の担い手不足解消の切り札と期待される「イネの初冬直播き栽培」に着目。家族や農業関係団体、農機メーカーの協力を

「明確なビジョン」周囲も協力 イネ初冬直播きに挑戦

得て、この日、町内で初めて30㍏の圃場で種もみの直播きにこぎつけた。

農閑期の晩秋から初冬に種もみを直播きする「イネの初冬直播き栽培」は、岩手大学農学部の下野裕之教授が平成20年から実用化に向けた実験を重ねてきた。

先月3日には、イネの種もみを越冬させるコーティング剤、チウラム水和剤(種子消毒剤)などの研究成果を技術マニュアルとしてネット上で公開。実用段階に入り、青森、岩手両県の農業法人の10㍏当たり収量は600㍏超で、一般的なコメ栽培と遜色がなくなっている。

阿部家はレタス、キャベ

ツなどの野菜を中心にコメを5畝栽培する専業農家。倫太郎さんは祖父の直三さん(72)と父の修一さん(45)を手伝ううち「農家を継ぐ」と思った。野菜を食べるのは苦手なので、コメづくりにしようと考えたと笑う。

農業新聞で初冬直播き栽培に興味を持ち、直三さんに初冬直播き栽培の導入を直談判。農業関係団体から農機メーカーのクボタに協力を要請し、町内で初めてとなる初冬直播き栽培の実現にこぎつけた。

「応援してやりたい」と思っただけで、予定だった30㍏を空けた」と直三さん。「高校1年生で明確な将来ビジョンと行動力を持っているのに驚いた」と舌を巻いたのは盛岡農業改良普及センター産地育成課主査農業普及員の臼井智彦さん。

みちのくクボタ担い手推進部企画チームの藤原辰徳さんも「高校生を応援しな

くちや」と、トラクターや運転手、種もみと肥料を地中に埋めるためのスリッパローラーシーダーを無償で貸し出した。

「将来はこの地域でコメを50畝栽培したい。初冬直播き栽培は、春に集中する農作業を秋に分散して規模を拡大できるのが魅力」と目を輝かせていた。

(石田征広、写真も)

※産経新聞 令和5年11月23日付
産経新聞社の許諾を得て掲載しています
※無断転載・複写を禁じます